第 11 回　熊谷市地域公共交通会議　会議録

開催日時　平成 24 年 6 月 26 日(火)
15:00～16:30
開催場所　熊谷市役所 603 会議室
出席者　　委員 18 名（代理者を含む）
事務局 5 名、傍聴者 2 名

1. 開会（司会：事務局　総合政策部企画課）

2. 会長挨拶(副市長)

3. 自己紹介

4. 議題（議事進行：会長）

議題１．国土交通省の補助事業「地域公共交通確保維持改善事業」

事務局から配布資料１に従い説明を行い、質疑応答の後、目標値を見直すこととなった。

(質疑応答)

(委員)

資料の中に満足度の数値が出ているが、これは実際に乗車した人の満足度か。

(事務局)

市内に住む人の中から 3000 人を抽出したアンケートを母体に、さらに江南地区の回答を抽出したもの。

(委員)

利用者数の目標値に関しては、例えば年度となっているが、これは平成 24 年 10 月から平成 25 年 9 月を平成 25 年度と見ていいのか。

(事務局)

年度についてはそのとおりである。

(委員)

平成 26 年と平成 27 年の間で目標人数が増えないのは何か意味があるのか。

(事務局)

公共交通連携計画において、最終目標を３万人に設定した経緯があり今回もそれに合わせて設定した。現在の一往復あたりの利用者が 10.6 人であることを考えつつ、今後の伸びを計画に反映していければと考えている。

(委員)

この会議では路線の利用促進策や見直しを考えることで、いかに利用者に喜んでもらえるかを考えるために協議していると思うので、今年よりも来年、来年よりも再来年と目標を増やしていったほうが利用者のためにも議論が深まると思う。

(委員)

大賛成である。どうやったら利用が増えるか皆さんの意見を聞くために会議を開いているのである。バスに多くの人が乗ってもらえるようにならなければまずいと思うし、路線の変更も含め考えていくべきだと思う。

(委員)

この制度について、地域の足は地域でというのが根本にあり、国やバス会社をはじめ関係者が集まって話し合うのだから、満足度アップは実際に乗ってもらって地域の足として根付かせられるかどうかにある。目標値が高いほうがいいというわけではないが、今年より来年、来年より再来年と目標を増やすことで地域の満足度を高めることになると思う。

(会長)

平成 27 年度の目標値はもっと高くてもよいということだが、事務局は目標が３万人である必要性はあるのか。変更はできるのか。

(事務局)

連携計画策定の際の数値をそのまま使用しているわけだが、この会議での皆さんの意見を聞きつつ、変更は可能である。

(委員)

逆に現在が２万３千人で目標が３万人ならば、もう少し現実的な数値を入れるのもひとつの方法である。連携計画の３万人という目標が実際に達成できればよいが、なかなか難しいというのなら何段かステップを踏んで最終目標を３万人にするというのもひとつの手ではないか。

(委員)

計画を一度定めたからといって変更できないというわけではない。事務局で動きを見て練り直すことも考えてほしい。

(委員)

運行側の立場から言えば、限られた車両でいかに速く安全にと言うのが第一なので、目標値を上げるよりもそのままでもよいと思う。ただ車両や路線の見直しがあれば利用の増加にも対応できると思う。

(委員)

今ゆうゆうバスには何人乗れるのか。

(事務局)

路線により異なるが、直実号は 35 人である。

(委員)

利用平均は 13.1 人だから、乗っているときは乗っているのだろうが、そうではないときも多いということである。

(会長)

目標を変えたほうがいいという意見とそのままでもいいという意見が出たが、補助申請するに当たってはここの数値はどちらでも問題ないのか。

(委員)

明確な基準はないが、この一連の流れは補助金のための申請ということではなく,目標や計画に向けてというものなので、スタートを切れば終わりというのではなく、来年より再来年というのが趣旨だと思う。

ここで関係者が何を話し合うかというと、いかにみんなに喜んで使ってもらえるかを考えるということなので、それを考えれば趣旨に合わせたほうがよい。先ほども出たが、年度途中で利用動向をみて目標を見直すこともできるので、それもひとつの手だろう。

(委員)

例えば平成 25 年度に目標が 27,500 人のところ、実際には 26,000 人しか利用がなかった場合も構わないのか。

(委員)

あくまで計画なので問題ない。だが地域の足を確保し、満足度を上げるためにこの会議に臨んでいる我々としてはいろいろ考えなくてはならないだろう。

(委員)

この会議の出席者は補助金無しで経営するという立場にいない人が多いように感じる。もっと真剣に満足度について考えて、「このバスがあってよかった」と思えるようにしなければならない。数値についても 30 パーセントで満足するのではなく 50 パーセント 60 パーセントを目指していくべきである。

(会長)

事務局はこの意見を聞いて修正は可能か。

(事務局)

皆さんのご意見を参考に、平成 27 年度を目標３万人として徐々にステップバイステップという形で見直しを行っていく。

(会長)

これについては一度数字を見直して、郵送等で委員の皆さんに確認を取っていくという形で進めてもらいたい。

議題２．ゆうゆうバスの利用促進策について

配布資料２-１、２-２、２-３をもとに事務局からゆうゆうバス各路線の利用者数について説明を行った。また、配布資料３をもとにゆうゆうバスの利用促進策について説明を行った。

(質疑応答)

(委員)

さくら号とグライダー号の利用者数が減となった理由とムサシトミヨ号が増となった理由は何か。

(事務局)

これまでの傾向として1月や5月の GW 期間は利用が少なくなるという結果が出ている。

(委員)

ムサシトミヨ号の増加原因はどう考えるか。

(事務局)

一部路線の見直しをしたことや聖天様への参拝客の利用が大きいのではないか。ただし逆周りのグライダー号が 3.8 パーセント減でムサシトミヨ号が 20.1 パーセント増のため原因を調べている。

(委員)

10 月に路線延長があった関係でムサシトミヨ号は大幅に時刻変更を行った。また聖天様の関係では、熊谷駅から聖天様まではムサシトミヨ号のほうが近いし利用しやすい。グライダー号だと時間もかかる上に行政センターで一回休憩が入る。利用が増えたのはそういった理由からではないか。

(委員)

勝因を分析することでそこに光が見えてくるように、増えた要因をますます磨くことができれば利用者増につながるだろう。できる範囲で分析することがその路線にあった利用促進策につながるはずで、例えば手間をかけずに運転手に最近の利用状況はどうか聞くだけでも効果はあるだろう。

(委員)

平成 24 年 2 月にアンケート調査を行ったということだが、頻繁に行う必要はないにしても「なぜ乗らないのか」という意見を集約し、改善するために一度アンケートをとったほうがいいと思う。

(会長)

昨年 10 月に走り始めてもうすぐ 1 年になるが、この 1 年間の状況を報告する場があると思うので、その際にアンケートなどを利用するのも方法のひとつだろう。

(委員)

先ほど聖天様の話が出たが、妻沼地域に行くバスは妻沼行政センターで休憩のためにかなりの時間停まっている。あれがなくなればどちら回りのバスでも妻沼地域まで行くのに便利になる。それから直実号だが、実際に乗車してみて現在の時刻設定ではかなり無理があるように思った。利用が少ないうちはバス停を通過しているので問題ないが、たくさん乗るようになればもう少し余裕が必要だろう。加えて今バスがどこを走っているか携帯電話で確認できるシステムがあればよい。また、ク

ールシェアとの関係で冷房の効いたバスに 1 日乗っても 100 円としたり、自転車からバスに乗り換えやすい停留所の整備をお願いしたい。バスに乗る人は運転免許証を持っていない高齢者が多いので、そうした人が待っていられるようなバス停を考えてもらいたい。

(委員)

直実号の利用が少ないのは、熊谷駅に行くのに遠回りをするので時間がかかってしまうのが大きいと思う。

(会長)

直実号が運行開始して時間がたつが、市に寄せられる意見としてはどのようなものがあるか。

(事務局)

路線上に大きな病院が 3 箇所あるので、高齢者を中心に病院に通いやすくなったという意見やもっとバス停を増やしてほしいという意見が寄せられている。それから逆周りの要望もある。

(委員)

イベント等があれば、ここにいくのに便利といった案内をチラシに載せたりすればよい。まだうちわ祭や花火大会は経験していないが、絶好のＰＲの場になるだろう。

(会長)

あとは交通規制の問題をどう解決するかという点がある。

(委員)

先ほども触れたとおり、時間は見直したほうがいい。今のままでは終便が早過ぎる。あとは東小や星川のあたりの狭い道では事故の恐れもある。

(委員)

直実号に関しては無料乗車の人が多いように思う。どういった人が利用しているのか。

(事務局)

直実号の沿線には病院が多いこともあり、高齢者や障害手帳保有者などの無料利用が多くなってしまう。また子供連れの利用も多く、親子 2 人で利用する場合は子供 1 人分が無料になっているという沿線利用者の特性がある。

(委員)

保育所をプロットして、そこに行くのにバスがどう通っているのか示せば、子供の送迎にバスを使ってくれるようになるのでは。「子育てするなら熊谷市」という標語もあるので、今後子育て世代を熊谷に誘致する上でも有効だと思う。

(会長)

今回いただいた意見を事務局のほうへ持ち帰り、対応できるものについては対応する。そして今年 9 月末で新路線の運行開始から一年が過ぎるので、そのときに

再度見直しを行ってゆうゆうバスの充実を図っていくということでご理解をいただきたい。

5. その他

事務局からは特になし

6. 閉会